

「柔らかな」死生観

—「高齢者心理学」を受講した大学生の感想から—

久保田 美 法*

はじめに

筆者はこれまで、学部で担当している「高齢者心理学」の授業の感想から、大学生が高齢者の心に出会うことの意味や、大学生が認知症高齢者をどう捉えるかについて考えてきた（久保田，2015，2016）。そこでは、高齢者のことを「僕にはまだ分からない」と思う一方、自分にも通じるものを感じて「正直意外」に思ったり、「足元が確かになったような安心感」を得ることもあること、また認知症高齢者は、私たちに馴染みの価値体系から離れた存在であるが、その姿を「新しい人」と捉え、「寂しいけどステキ」「ステキだけど寂しい」と受けとめた様子等がみられた。本稿では、この授業で必ずしも中心的テーマとしてきたわけではないが、その底に常に流れていたともいえる「死」というテーマについて、学生がどのように感じていたかをとりあげる。あわせて、学生の感想を紡いで提示するという方法の意義についても、本稿の最後で検討したい。

I 超高齢社会と「死生観の空洞化」

日本の総人口に占める65歳以上の高齢者の割合は26.7%となり、国内における80歳以上の高齢者人口は1,000万人を超えた（総務省，2015年9月）。日本は世界でも有数の超高齢社会である。さらに2035年には、総人口に占める高齢者の割合は33.4%と、3人に1人が高齢者になるとも言われている。こうした超高齢社会の課題として、総務省は働き手の主力とされる15歳以上65歳未満の「生産年齢人口」の減少や、介護負担の増大をあげている。しかし問題は「働きながら家族の介護をする人」が増えることだけではない。介護の先には——あるいは介護の必要はなくなるとも——必ず死が訪れる。

超高齢社会は「多くの人が寿命を全うできる社会」であるが、団塊の世代が超高齢期に移行するまで死亡者数は増加し続けると予想される現代の日本は、「未曾有の大量死の時代」で

*総合福祉学部 専任講師

もあり、「死はきわめてありふれた出来事」となる（佐藤，2014）。有名人が高齢になり死亡するというニュースに触れる機会は増え、またこれまでは病院等の医療機関での死が圧倒的に多かったが、今後は特別養護老人ホームなどの高齢者福祉施設でも増加するとともに、在宅医療や訪問看護が拡充していけば、家族での死の看取りも徐々に増えてくることが予測される。

しかし、こうした状況にあって、日本では、「死生観そのものがほとんど『空洞化』している」（広井，2001）。安楽死や尊厳死、延命治療のような「生の内側に完結した話」は議論されても、「『死』そのものをどう理解し、あるいは死ということを生の全体との関係でどうとらえるか」という「ターミナルケアの本質とも言える点」については、対応が遅れがちである。広井（2008）はまた、日本人の死生観を三つの層——第一の「原・神道（（汎神論）的な、生と死が連続して一体化した層」、第二の「仏教（あるいはキリスト教）的な、生と死が二極化している層」、第三の「唯物論的な、生＝有、死＝無とされる層」——に整理し、戦後の高度成長期に次々と脇にやり忘れていった第一・第二の層をもう一度確かめ、そことのつながりを回復することが、成長や拡大に代わる「新しい価値の発見」につながるのではないかと述べている。

もとより死生観は高齢者のみの問題ではない。しかし、「死の予感に堪えつつ」生きている高齢者のそれは「観念的なものではなく、現に日々生きられているがゆえに本物」（土居，1975）である。その高齢者の死生観に学ぶことは、生と死の「つながりを回復」し、「新しい価値を発見」する一つの道とも言えよう。もとより「高齢者心理学」は、そうしたことを直接の目的とした科目ではない。しかし、授業を通して、高齢者が日々何を感じて生きているかに触れることは、生と死の「つながりを回復」する機会の一つになりうると考えられる。

Ⅱ 死の不可知性と学生の感覚

筆者が担当している「高齢者心理学」では、各回の授業テーマに添って、いくつかの視点を紹介するとともに、映像や事例を通して、学生各自が高齢者の心に思いを馳せ、理解を深めることを目指している。20代の学生にとって、老年期は遙か遠いものであり、理解し難く思う面があるのは当然で、それを今、無理に分かろうとする必要もないだろう。とはいえ、その感想には、学生ならではのフレッシュな感覚や率直な言葉が書かれており、その感じ方や捉え方から、考えさせられることも多い。

感想には、しばしば「～ということのような気がした」「～な感じがした」「～なように思えた」「何故か～を感じた」「～と感じるのは不思議だ」といった言葉が散見される。これらはきわめて曖昧な表現であり、何故そう感じるのかは自分でも分からず、説明はつかない、感覚的なものと考えられる。しかし、映像や事例を通して、高齢者の心に触れて、自らの心も動かされることがあると推察され、それは感覚的なものだからこそ、学生にとって、一瞬

ではあれ、何らかのインパクトを伴った体験になっているとも思われた。実際、人の心を動かし、支えるものは、観念的な思考ではなく、その身に確かに感じられるものではないだろうか¹⁾。

そもそも死とは、不可知なものである。死といかに向かいあい、理解していくかについて、日本では1980年代以降「死の準備教育（デス・エデュケーション）」が、病院や施設の研修、学校現場における「いのちの教育」の一環など、様々な場所で行われるようになってきた。しかし、心理療法家の明石（2003）は、「分かること」に頼りすぎて、社会的に望ましい意味や価値を死に付与しようとする姿勢を推し進めれば、「受容された死」「前向きな死」「意味のある死」についての話は聴くことができて、そうではない死についての話は十分に聴くことができなくなってしまう可能性がある指摘している。そして、民俗学者の柳田國男を引用しながら、かつての日本には、死の意味を明確にしないまま日常の中において、ゆるやかにつきあいを保ってきた伝統があることに言及し、個人の領域で、死をもう一度「わからないもの」として日常においてみることを問題提起している。これは前節の広井（2008）の提言とも重なるものであろう。

この点において、先に挙げたような学生たちの曖昧で感覚的な表現は、「分からないものを分からないままにどう感じているか」をそのまま示しており、現代において「死とゆるやかにつきあう」端緒として、貴重なものとも考えられる。学生の感想は素朴であるが、それゆえに、その生の言葉は、私たちの心に直接響いてくる。

本稿は、高齢者の死生観そのものを問うのでも、若者の死生観を対象化して研究するものでもない。「現に日々生きられているがゆえに本物」（土居，1975）である高齢者の死生観から、学生が何を感じとったかに焦点を当てる。そこで学生が感覚的に捉えたものを示すこと²⁾を通して、「死生観が空洞化」（広井，2001）している現代にあって、生と死のつながりをいかに回復していけるかを考えてみたい。

Ⅲ 「高齢者心理学」を受講した学生の感想

1. 普段のかかわりから

1-（1）「それってどんな感覚なのだろう？」

授業では、まず「衰退」と「成熟」という老化の二つの側面を紹介し、E.H.Eriksonに代表されるような老年期の心理的課題を講じた後、中盤で「老年期における死」というテーマを取りあげた。リアクションペーパーでは、死にまつわる率直な言葉や、自分の祖父母や両親の死に思いをめぐらした感想が散見された。

「いつものような生活を送っている時、ふと死ぬことが尋常じゃないくらい怖くなることもある。自分の親との別れを想像し、一人っ子であることがすごく寂しく思える。死んだらどうなるのだろ

う？自分が経験したすべての出来事が消えていき、何も感じなくなって、意識が遠のいていく。それってどんな感覚なのだろう？」

「小中学生の頃、手塚治虫さんの『火の鳥』を読んで、輪廻転生を知り、すごく感銘を受けた。だから、私自身、死に対してあまり怖いと思ったことはない。しかし大きくなって、祖父が亡くなった時、その死を今まで自分が思っていたようには受け入れられなかった。」

「私も死について考えられない。祖父母が自分たちが死んだらこうしてほしい……などと言っているのを聞くと辛くなるし、死んでほしくないと思う。人はいつか死んでしまうと頭では分かっているのに、心が死を拒んでいるような感じなのかな。」

自分という意識や存在がすべて消えてしまうということへの恐れや不安は、私たちが死に対して抱く大きなものの一つだろう。また祖父母の死に接したり、親の死を想像した時——Jankélévitch（1966）のいう「二人称の死」——「心が死を拒んでいるような感じ」になるのは、人の自然な姿の一つであり、正直な言葉であると思われる。一方、「それ（死ぬ）ってどんな感覚なのだろう？」という言葉が発せられた時は、自分の想像の領域をはるかに超えた世界や状態に一瞬ひらかれているのではないだろうか。そこには恐怖というよりも、もう少しニュートラルな、何とも名づけがたい感じもあるように思われる。

これを書いた先の学生は、それに次いでこんなことも書いている。

「(そんな時)ふと親を見ると、一瞬死ぬことが怖くなくなる。人生の経験って、自分が思っている以上に壮大なのかなと感じている。それはきっといずれ分かるのかなと思うと、少し前向きな気持ちになれた。」

ふと目にした親の姿の何をみて「人生の経験は、思っている以上に壮大なのかな」と感じたのかは分からないが、そこから「少し前向き」になれたとは、どういうことだろう？

1－(2)「なんだか引がかかる」けど「そうじゃないような」

死生観は個人により異なるものだが、年齢を重ねるごとに変化もしていく。その一例として、ある70代後半の女性が、リスクの高い手術を受けることに際した時に述べたという次の言葉を紹介した。

「もう私ね、この年まで十分に生かしていただいて、何も思い残すことがないの。今とても幸せです。いつお迎えが来てもいいと思っているわ。だからこそ、こんな大きな手術を受ける気になったんですよ。もっと若い時だったら、死ぬことが怖くて、手術なんか踏み切れなかったか

もしれない。もう、どうなってもいい、安心して死を迎えることができるわ、って、まな板の上の鯉になった気分だわ」(茂木, 2012)

この言葉を聞いた学生の中には次のような感想があった。

「まるで自分の命なのに自分のものじゃないように話すから、なんだか引かかる言い方だなあと
思った。自暴自棄のように聞こえるけど、そうじゃないような気がする。」

「自分の命なのに自分のものじゃないように話す」のは、若い世代では「自暴自棄」である
場合が多いのかもしれない。しかしこの学生は、そうした馴染みの捉え方で片づけてしま
わず、この語りにそれとは違う何かを感じとっている。

この女性は、確かに、別の学生の次の言葉のような心境であったのかもしれない。

「この人は死を受けとめつつ、生きることに希望を抱いているのだと感じた。」

また病気の祖父に会いに行くことにためらいを感じるというある学生は、『モリー先生と
の火曜日』(M. ジャクソン監督, 1999年)という映画を見て、次のような感想を述べた。

「(祖父と会って) 悲しくなるのが怖い。でも当の祖父は死とはとっくに向き合っていて、何だかズ
ルいと思う……。 (映画の中でモリー先生が) 『死は成長だ』というふうに言っていてハッとし
た……。ここまで言えるようになるには何が必要なのか……。」

この学生は祖父が「ズル」をしたと思っているわけではないだろう。もとより「死と向き
合う」ことは、勝ち負けの話ではないはずだが、一方的に勝負をしているように感じ、そし
てその勝負に、あるいは勝負をする前に、負けたような感覚——これじゃ勝ちようがない
じゃないかというような——を覚え、自分と同じ土俵に引き寄せたいと思ったのかもしれ
ない。しかし、そこから「ここまで言えるには何が必要なのか……」という、祖父が経てき
たものへと思いを馳せている。

2. 映画『モリー先生との火曜日』から

2- (1) 「たくさんのことを思い返す時間」「そういった感情の全てが」

『モリー先生との火曜日』は、スポーツライターとして華やかな日々を送っていたミッチ
が、ある時、大学の恩師モリー先生がALS (筋萎縮性側索硬化症) に罹っていることを知っ
て再会を果たし、交流を重ねていく映画である。モリー先生は、温かなユーモアを湛えなが
ら、ミッチに多くのものを残していく³⁾。

「死を間近に感じている高齢者はとても怖くてさみしい思いを抱えているはずなのに、それを周り

の人に感じさせないよう振るまえる強さを持っている。またそれを伝える、語れる強さも高齢者にしかない強さだと思う。（中略）歳をとった時、死を間近に感じた時、すぐには受け入れられないし、どうにかできないのかと抗い、時にはつらい思いをするのならすぐに死んでしまいたいと思うのかもしれないけれど、そういった感情の全てが死と向きあっていることにつながっているのだと気づかされた。」

「今までのことを幸せ、楽しい、悲しい……たくさんのことをもう一度思い返し感じる時間が、死を自然のものとして受け入れることにつながるということも教わったようにも感じる。」

死に抗い、いっそ死んでしまいたいという思いも含めた「感情の全て」や、これまでの人生で体験してきた「たくさんのことを思い返し感じる時間」に思いを馳せた時に感じられるものは、先の学生が述べた「人生は自分が思っている以上に壮大」という感覚にも通じるように思われる。あの学生が「少し前向きになれた」のは、そうした人生の「大きさ」を生きることが、自然と死の準備にもつながっていくことを、どこかで感じた面もあったのかもしれない。

2-（2）「その人の一部が流れてくるのかな」

『モリー先生との火曜日』では、自分の生き方に言及する感想もあった。

「一番強く感じたのは、死に近づく人のそばにいて、その人の一部が自分に流れてくるのかなということだ。その人の考え方が少しでも多くの人に届き、少しでも影響を与えることが、本当の意味での受け継ぐということなのだろう。これから死ぬであろう人の言葉の一つ一つが大きくて重いものなのに、それらすべてを吸収するにはとても時間が足りないんだと思った時、大切なことを教われる時間は恐ろしく短くて、一度逃したら二度とその人から教わることはできないんだと思った。」

「死と向き合うのは自分だけではなく、まわりの人もその人の死と向き合わなければいけないものだった。生かされているから死ぬのではなく、死ぬから生かされているのかと思うようになり、死を間近にしたとき、今までの生き方やこれからの生き方を誇れるような『生』を受けたい。」

ここにみられる、時を惜しむかのような、ある種の切迫感は、死が近くなった人が感じる時間感覚と似ているようにも思われる。また「生かされているから死ぬのではなく、死ぬから生かされている」とは、生と死の基点が逆転することを意味しているのだろうか。ここで、「誇れるような生」を「生きたい」ではなく「受けたい」と、「生」を能動的に「受け

る」ものと表現していることも注目される。この学生がそれと意識していたかは分からないが、この言葉は「生を受ける」という認識があるからこそ、主体的に生きられることを示唆しているようにも思われる。

3. 宅老所「よりあい」の様子から

3-（1）「案外死ぬことの方が楽と言っているよう」

さて、授業では「高齢者と死」の回を経て、「高齢者の生きがい」をとりあげ、生きがいにまつわる様々なつながり（子や孫とのつながり、同世代や異性とのつながり、過去・現在・未来のつながり、親や故郷、自然や「あの世」とのつながり等）について触れる中で「身体と心のつながり」についても考え、次いで高齢者によくみられる疾患を説明し、認知症へと話を進めていった。モリー先生が雇っていたALSは、意識は明瞭なまま、身体の各機能が徐々に冒されていく病気であったが、認知症は脳の病変により、記憶や言葉がちぐはぐになっていく点では対照的とも言える。

授業では、ある宅老所の様子を紹介したVTR「ただそこにいることで～詩人・谷川俊太郎 老いを見つめて」（NHK教育、2003年12月20日放送）を視聴し、その後、番組にも登場していた二人の認知症高齢者の以下のような会話を讀んだ（村瀬，2011）。

健治 わたしの所在はどこでしょうか。

キヌ ぜんざいが欲しいとなあ。

健治 いやあ、私の「しよ・ざ・い」はどこですかあー。

キヌ あー、ぜんざいがほしいとなあ。

健治 いや、ぜんざいは関係ありませんよ。

キヌ （怒）ここは、ぜんざいなんか売りやらん。

健治 なし、こげなつたか、さっぱり分からん。なし、ここにおるとですか。

キヌ 早よ、死なないかん。今まで、悪行を重ねてきたから死ぬことができん。早よ、死んで地獄に行かなあ。

健治 今が地獄ですよ。

キヌ 私からみれば、あんたが極楽じゃ。

健治 そうでしょうか。そうは思いませんけど。これからどうしたらいいんでしょうか。

キヌ そら、ナンマンダブを唱えろとたい。仏様が迎えに来る。

健治 ナンマンダブ。

キヌ ナンマンダブ。

健治 ナンマンダブ。

キヌ よか人なら死んどる。

健治 よか人なら死んどる。

キヌ あなたの話はよ一頭に入る。もっと話してね。

健治 私はどうしたらいいんでしょうか。

どこかユーモラスでもある二人の会話はこの後もまだまだ続く。2頁ほどにわたるその資料を読んだ感想として、次のようなものがあった。

『『しょざい』と『ぜんざい』の話からどんどん会話が展開され、右往左往するが、話の源はなんとなく合っていて、『あの世に旅立つ』ことを無意識に話していたのかな。』

「認知症に向き合っているのは、何も家族や施設の職員さんだけではない。ポケていくその人自身も苦しみ、葛藤し、答えのない問いをいろんな人に問いかけているように思えた。」

「二人の会話は、上手く表現できないけれど、案外死ぬことの方が楽だと言っているような気がする。生きることが苦しいのはあたり前で、それでも生きていかなきゃいけない。たとえ生きる意味を失い忘れたとしても。そんな感じがした。」

認知症だからといって、その会話はただちぐはぐなのではなく、「話の源はなんとなく合っている」。そして、生きることは喜びや楽しみであり、死は哀しみや苦であるとは「案外」言えない。それでも「答えのない問いをいろんな人に問いかけ」ながら「生きていかなきゃいけない」。しかし、この言葉には不思議と悲壮感があまり感じられない。それは、キヌさんや健治さんの在り方によったのか、学生の感じ方によったのか。学生がいわば「その人の一部が流れてくるよう」に受けとったゆえとも考えられる。

3－(2)「自分が今生きてることに集中する期間」

この会話の数年後、キヌさんの食は少しずつ細くなり、眠る時間が徐々に増えていく。この宅老所では無理な延命治療はせず「末期の人の身体が発する無言の訴えに耳をすませば、必要な支援が見えてくる」（村瀬，2011）というスタンスで高齢者に寄り添っている⁴⁾が、そこでキヌさんの在り様を読んだ時の感想には、以下のようなものがあった。

「キヌさんの周期の変化、リアルに死に近づいてゆく感じ、ゾクとした。」

「枯れるように亡くなるというのは、人間の限界を表していて、対策とかのレベルではない、手が出せないということがとても悲しく感じた。」

「認知症の人は、死を迎える時、どのように考えて旅立つのだろうか。何とも切ない授業であった……。」

またこんな感想もあった。

「生きるためにすることができない自分に自分が困惑しているんじゃないかしら。」

何もしたいことができなくなり、周りも手が出せなくなることを「悲しく」「切ない」と感じるのはもっともなことで、また実際、キヌさん自身も「自分で自分に困惑」している面もあったかもしれない。

一方、そこにキヌさんの意志のようなものを感じた学生もいた。

「食べなくなる、眠ることが多くなることは、死が近づいているからそうなるというよりかは、自ら死を選択しているような印象を受けた。生きることより、死を待つことをキヌさんが選んだような気がする。」

「まだそういう力が最後まで残っているんだと思った。」

「体はあんなにもう弱っているのに、頭というか考えは体とちがって日々衰えていくというよりも日々更に上へ行っているような気がした。」

さらに、以下のような感想もあった。

「なかなか出来ることではないが、やりきった終わり方のような気がする。また眠る時間が増えて食事が減った期間は、死を待っているようにも見えるが、自分が今生きていることに集中する期間のような気がした。」

「今生きていることに集中する期間のような気が」したのは、そうした在り様に、今まで自分が重要と考えていた「生きていること」の意味が削ぎ落とされ、むしろ、これこそが「今生きてること」なのかもしれないと思ったということだろうか。

「眠ることを優先するようになるということは、食べることよりも大切な何かがあり、それが何かははっきりとは言えないが、それが何かを知ることができるような生き方ということを自分はしたいと思った。」

まさにそれは「それが何かははっきりとは言えない」ものだろう。しかし「それが何かを」「知りたい」ではなく、「知ることができるような生き方をしたい」とあるのは、「何か」を把握することよりも、「何か」は分からないまま、それを大切に思う時、生き方が変わってくることを示唆しているのではないか。また「それが何か」は、「いずれ分かるのかな」といった心持ちがどこかに含まれているようにも思われる。

4. 距離感の様々

4-（1）「へこむよねー」「ねー」

とはいえ、高齢者や死に対する学生の感じ方や受けとめ方は、もちろん一様なわけではない。実際、リアクションペーパーではないが、学生同士の何気ない会話の中で、この授業は死についての話題が多くて「へこむよねー」「ねー」と話していたのを耳にしたこともある。重苦しく感じられる事柄について、真正面から語りあうなど気恥ずかしいという面もあったかもしれないし、「ねー」と同調することで連帯感を強める心理がはたらいたとも考えられるが、友人同士だからこそ漏れ出た本音という面もあっただろう。「へこむ」という、一見軽めの言葉を使うことで、死の話がある意味で拒み、あるいは担当教員に直接伝えたものではないが、授業へのアンチテーゼといった面もあったかもしれない。

また「高齢者と死」をとりあげた回には、こんな感想もあった。

「今日は大変申し訳ありませんが、リアルタイムで死と直面しているので考えられませんでした（犬ですが）。」

死の話は確かに重苦しく、抱えきれないものを突きつけられるように感じさせたり、時には暴力的なものになってしまうこともあるだろう。逆に言えば、本稿でこれまでとりあげてきた感想は、死というものを今は「リアルタイムで直面」してはいなかったからこそ語れた面があったとも考えられる。

4-（2）「変わってしまうんだなあ」

また以下の感想に耳を傾けることも必要だろう。

「どんな形であれ、人の死に関わった人は、変わってしまうんだなあと思った。『夏の庭』の3人の子どもたちは前向きに変わったけど、認知症の男性は関わりを外から見ると普通(?) っぽいけど、きっともう戻れないんだと感じた。」

『夏の庭』（相米慎二監督、1994年）は、死ぬってどういうことだろう？ という好奇心から近所の一人暮らしのおじいさんを“見張る”ようになった3人の少年が、次第におじいさんと親しくなり、おじいさんの秘密にも触れ、やがておじいさんが亡くなるという、出会いと別れの一夏を描いた物語である。また「認知症の男性」とは、戦地で味方同士が争ったこと、小さな子どもを殺したことを「あれは忘れられるもんやない」と、淡々と、どこか飄々とした調子で語られた事例のことである。

人の死に接することによって、死が刻まれることによって、その後の人生が変えられてしまうという側面は確かにある。本稿では「つながり」という言葉を何度も使ってきたが、死

には人生における大切なつながりが切断されてしまう痛みが伴うこともまた事実である。

ただ、この「変わってしまうんだなあ」という言葉には、その重みを感じながら、それ以上でも以下でもなく、良い／悪いや、嬉しい／悲しい等の価値判断は入れず、ただただそう感じたという感慨を表しているという印象もある。これは冒頭に挙げた「それってどんな感覚なんだろう？」に通じる感覚のようにも思われる。こうした在り方は、「わからないものをわからないままに日常に置いておく」「圧倒されるのでもなく知で押さえ込むのでもなく死とつきあうこと」(明石, 2003) にもまた通じているのではないだろうか。

5. 感覚の素地

5- (1) 「覚悟よりもっと柔らかい気持ち」

さて、これまでみてきた学生の感想の中には「死と向きあう」「死と直面する」という言葉がしばしば出てきた。そこには、高齢者は“きっと向き合っているんだろうな”という想いととも、どこか“(今の) 自分にはとても無理……”というような感覚も混じっていたように思われる。しかしそれは、本当に手が届かないことなのだろうか。

「(モリー先生の言葉は) とても素敵な言葉のはずなのに、死の近づいた高齢者が言う、何ともいえない辛さ、悲しみを含んでいるようにも聞こえる。時間を重ねていくなかで、少しずつ体が蝕まれ、残された時間がわずかになったとき、自分自身の死とあまり向き合うことがない私達が発する言葉にはない重みや美しさがあるように思う。またその言葉は『がんばれ』のようにただ真っ直ぐではなく、心に刺さるような鋭さもあれば、柔らかく優しい響きもあると思う。」

「(宅老所のVTRを観て) 同じような高齢者の仲間が近くにいることで家族とは違った温かさがあったのではと感じた。日々『死』へと向かっていく中で、覚悟よりもっと柔らかい気持ちであるからこそ、若い人達にできない表情ができるのかなとも思った。」

人が死について考えたり、死と向き合うには、何らかの強さが必要である。しかし、「『がんばれ』のようにただ真っ直ぐな」強さは、どこかでポキッと折れてしまうこともあるだろう。また「覚悟」とは、一般に強い意志が必要とされるものであるが、それよりも「もっと柔らかい気持ち」という表現は、興味深い。柔らかな言葉の響きも、柔らかい気持ちから生まれる表情も、本人が意図して出来るものではなく、どこか力が抜けている時、自然と表れるものであろう。

「私は家族に『葬式はその人がどのような人柄だったか、どんな人生を歩んできたかがわかるん

だよ』と言われ続けてきた。家族の葬式といたら、曾祖母しか参加したことがないが、穏やかで温かく、葬式にも関わらず微笑ましい柔らかな葬式だった。遠いところからも来ている親戚がいて、曾祖母はみんなに愛され、大事にされてきたのだなと印象を受けた。曾祖母とは、小さいときにしか話したことがなかったが、とてもよく笑う、しっかりした優しい曾祖母だったらいい。葬式は、曾祖母を見送るための式なのに、曾祖母に包まれたような柔らかな葬式であった。」

曾祖母の柔らかな人柄が、その葬式の際にいる皆をも包み込む。その柔らかさは、その姿に触れる者をも柔らかな気持ちにさせてくれたようでもある。こうした「柔らかな」死生観を感じとるには、学生の側の柔らかな感性も介在しているのではないだろうか。

5-（2）「何だか胸にストンと」

高齢者の様々な姿や言葉は、学生の胸にグッとくることもあれば、引っかかることもあり、またすっと入ることもあったようだ。

『モリー先生との火曜日』で、先生が、毎日“肩にとまっている鳥”と対話をするという場面について、こんな感想があった。

「何だか胸にストンと落ちてきた。（“鳥”に語りかける）『悔いはないか』『望む人になれたか』とかは、死を受け入れている人、目前にしている人ではないと、なかなか思い浮かぶ質問ではないと思う。でも死よりも重くなくて、神とかに尋ねるよりも鳥の方が怖くないし、抵抗が少ないから受け入れやすいのかと考えた。」

また認知症高齢者の言葉が少しずつ断片化していく在り様を、「土に還っていく過程」（久保田，2005）と表現した際には、

「土に還るイメージは火葬してしまう日本では現実には即したものではないようにも感じるけれど、それ以上にしっくりくるのがいつも不思議だと思う。」

という感想もみられた。

イメージというのはまさに、いわゆる客観的現実とはまた別次元のことであると知らされる。

また認知症高齢者の事例（山中，1991）を紹介した際には、

「（著者の）“呆けていく中にも人間の実存の一樣態がある”という考え方は新鮮だった。しかし、とても納得した。その人らしさというのは、死の瞬間まで、あるいは死後も続いていくのだなと思った。」

という感想もあった。

さりと「死後も続いていくのだな」とあるが、この学生は具体的な死後の世界のイメージ等を普段から持っていたのだろうか。事例に接した時、“ふとそんな感じがした”ということだったようにも思われる。

明石（2003）は、「かつての日本人が表向きは仏教に帰依しながら伝統的な民俗信仰も捨て去らずにきたように、現代人もまた、合理主義や科学の発達のもとにありながら、意識の底にはかつての他界観・死生観を地下水脈のように保持しているはず」と述べている。モリー先生の「肩の鳥の話」がストンと胸に落ちたり、「土に還る」という言葉がしっくり来たり、「死後も続いていくのだな」という感想がさりと出てくるのは、必ずしも普段からそうした観念を持っていなくとも、学生の内に、いわば感覚の素地として、生と死が自然とつながっているような「かつての他界観・死生観」が、「地下水脈のように保持」されていることを示しているのではないだろうか。

Ⅳ 「半具象」の物語

本稿では、学生の言葉を紡いで、生と死の自然なつながりを感じとる学生の柔らかな在り様をみてきた。できるだけ多様な感想をとりあげるようにはしたが、ここで示したのは、提出された感想を包括的に網羅したものではない。事例や映像に接して、その時ふと心に浮かんできたと思われるものに焦点を当て、それらの底に流れる「感覚の素地」が浮かびあがることを重視した。本節では、ここまで示してきた学生の言葉の提示方法と、その意図や意義について考察する。

「この世とあの世のイメージ」研究において、死後の世界が本当に存在するかという問いを扱うのではなく、現代のふつうの人々が他界やたましいについて抱いている素朴なイメージを、できるだけありのまま見える形にすることを考えたやまだ（2010）は、あの世のイメージ画を数多く収集し、それらを整理してモデル図を作成した。高齢者の姿に触れた感想から、現代における生と死のつながりを考えることを目的とした本稿では、様々な学生の言葉を、互いに関係しあっているもの、一人の人の心の中にもあるものと捉え、それらの断片を紡いで、ゆるやかな物語のようなものを描いてみることにした。

各節の小見出しに、学生の言葉の一部をそのまま提示したのは、そこに抽象的な要素に還元できないものが含まれていると考えたからである。すなわち、その言葉に込められた様々な意味やニュアンス、その言葉自体の力や、その言葉がまとっている気配を重視し、そこから各自が連想をふくらませられるよう配慮した。

やまだ（2010）はまた、あの世のイメージ画から生成したモデルを「半具象モデル」と呼んでいる。半具象とは、抽象と具象の中間に位置づけられるもので、「具体的なイメージの

もつローカルで生き生きした意味の本質を保持しながら、あまりにローカルで個別の具体性や複雑性に限定されることから免れるモデル」であると述べている。本稿で試みたものは、言葉による「半具象」に近いとも考えられる。

ただ、ここで筆者が本稿で示してきたものを、「モデル」ではなく、とりあえず「物語」と呼ぶのは、「モデル」という言葉は、どうしても物事を理解するための「参照枠」というイメージが強いと考えるからである。やまだ（2010）は、モデルを「現象を相互に関連づけ包括的にまとめたイメージを示す」のみならず、「そのイメージによって新たな知的活動を生成していくシステム」と定義している。しかし、「物語」とはそもそも、物事を対象化して理解するためのものではない。「生きるとは、自分の物語をつくること」（小川・河合，2011）と言われるように、その事象に自分を入れ込んで、その事象を主体的に「生きる」ためのものである。

さらに本稿では、物語の筋を示すこと自体が目的でもなく、それを通して、「分からないもの」が、形は不定なまま浮かびあがることの方が重要であると考え。学生の感覚が捉えたものを辿ることによって、私たちも、「死」という不可知なものの一端に触れることができたのではないだろうか。「物語」の「モノ」とは、本来、「物の怪」のように、目には見えず、とらえることはできない「モノ」が語ることを指す（川戸，2001）。

このように、学生の感想を、「半具象」という、具体性をもちながら、それに規定されず、ふくらみや余韻、あるいは余白を備えた物語のように示すというこの提示法は、死という不可知なものと、「分からないままにいかにつきあうか」（明石，2003）という本稿のテーマと呼応するものと考え。とはいえ、ここで示した手法は、未だ試みの段階である。今後さらに吟味を重ねていくこととしたい。

V 現代に生きる「地下水脈」

本稿では、筆者が担当する「高齢者心理学」の学生の感想から、現代において「生と死のつながり」を回復していくための端緒を探ってきた。

前節で引用したやまだ（2010）の研究は、他界の实在の有無にかかわらず、問われれば、多くの人々がそのイメージ画を描けるという事実を示していた。本稿で提示してきた学生の感想で述べられていた内容は、普段から意識している観念というよりは、意識の辺縁から出てきたものと考えの方が、実際に近いと思われる。意識の辺縁で生じたものであれば、そう感じた理由等を具体的に答えることは難しいかもしれない。しかし、まずはそうしたものが学生の内に、感覚の素地としてあることを捉えて示した点に、本稿の一つの意義があると筆者は考える。

現代における「生と死のつながりの取り戻し」（広井，2001）は、個々人が取り組んでい

くしかない。「かつての他界観・死生観」が、意識の辺縁に「地下水脈のように保持」(明石, 2003) されていても、ただ過去に回帰することは出来ない⁵⁾。私たちに問われているのは、その「水脈」から何を汲みとって、今の時代を生きていくかである。学生たちの感想には、その「水脈」を浮かびあがらせる喚起力があり、また、高齢者の姿には、そうした感想を引き出す力があることも、本稿ではみることができた。こうした力や“感覚の素地”を信頼し、そこに呼びかけることは、「つながりの取り戻し」にもなっていくだろう。また学生のフレッシュな感覚に促されて、自らの“素地”を省みることもできるはずである。

不可知な死が語りかけているものに耳を傾ける素地が備わっているのだとすれば、私たちはそこにいかに心を向けていくことができるだろうか。今後の課題としたい。

注

- 1) 例えば人の心の変容に関与していく心理療法で用いられる箱庭療法では、沢山あるミニチュアのおもちゃから何を選びどこに置くかは自由であるにもかかわらず、その時ぴたりくるものがあるが、何故そうなのかは自分にもよく分からない。石原(2015)は「箱庭療法の治療的仕掛け」を考察する中で「制作者本人でさえ自身の体験を論理的に言語化できないことこそが、アイテムを置く体験の主要な特徴」と捉え、箱庭制作の過程を表す言葉は「非論理的で非合理的なことばである」というそのことが、内的な心理現象をよりよく伝達しているのではないかという積極的な位置づけが可能」と述べている。
- 2) 久保田(2015, 2016)と同様、ここでとりあげる学生の感想は、毎回授業の終わりに提出するリアクションペーパーと期末試験の答案を指す。これらを論文に掲載することについては、授業と期末試験を終了し、成績評価を終えた後、掲示で研究趣旨の説明とその許可を依頼し、一定期間内に筆者に連絡があった者の感想については掲載しないこと、またその期間内に特に申し出がなかった者については了解を得たこととする旨を伝えた。
- 3) モリー先生の温かなユーモアは、教え子のミッチのみならず、観る者の心にも温かなものを残してくれるが、そこだけに注目していると、見逃してしまう面もあるだろう。土居(1976)は、死を真正面から見据えてたじろぐことなく進んでいる高齢者は、だからといって、死に全く動かないということではなく「一見動じないように見えても、その蔭に何か深い感動が秘められている」のであり、だからこそ「字面だけを見ればほとんど軽々しいともいえる言葉が、聞く者の心を強く打つ」のだと指摘している。
- 4) このように、最先端の医療を求めるのではなく、自然な最期を大切にする取り組みとしては、他に國森(2012)が紹介しているような滋賀県東近江永源寺地区の事例もある。死を忌むべきものにとらえず、日常の先にある出来事としてとらえる村の人々の姿は、「“みとりびと”——看取りの時間に伝えあうこと——」(NHK教育, 2014年8月5日放送)という番組でも紹介され、この授業でも視聴した。
- 5) 本稿でもとりあげた「宅老所よりあい」の村瀬(2011)も、かつてあったような自然な死の過程に寄り添う取り組みについて、その著書で「単なる回顧主義的な共同体意識の復活を願うもの」ではなく、「老いを通して見える現代社会のいびつな面を生活者として捉える努力をすること」で、今後取り組むべき課題の確認をおこなったと述べている。

文 献

明石加代(2003) 死と心理療法, 横山博編, 心理療法 言葉／イメージ／宗教性, 新曜社, pp223-244.
土居健郎(1976) 老年期の死生観, 長谷川和夫・那須宗一編, HANDBOOK 老年学, 岩崎学術出

- 版, pp266-273.
- 広井良典 (2001) 死生観を問いなおす, ちくま新書.
- 広井良典 (2008) 生と死の時間, 島菌進・竹内整一編, 死生学 1 死生学とは何か, 東京大学出版会, pp137-160.
- 石原宏 (2015) 箱庭療法の治療的仕掛け 制作者の主観的体験から探る, 創元社.
- 川戸圓 (2001) 「モノ」の語りとしての妄想と物語り, 河合隼雄編, 心理療法と物語, 岩波書店, pp153-193.
- 久保田美法 (2005) 痴呆老人から受けとるもの——日常の意味再考, 心理臨床学研究23 (1), pp44-53.
- 久保田美法 (2015) 老いへの関心は生きることへの関心——「高齢者心理」を大学生が学ぶことの意義——, 淑徳大学研究紀要 (総合福祉学部・コミュニティ政策学部) 第49号, pp47-62.
- 久保田美法 (2016) 「新しい人」としての認知症——「高齢者心理」を学ぶ大学生の感想から——, 淑徳大学研究紀要 (総合福祉学部・コミュニティ政策学部) 第50号, pp149-162.
- 國森康弘 (2012) いのちつぐ「みとりびと」, 農山漁村文化協会.
- 茂木七香 (2012) デス・エデュケーション, 山口智子編, 老いのところ 寄り添うところ, 遠見書房, pp186-195.
- 村瀬孝生 (2011) 宅老所よりあいの仕事 看取りケアの作法, 雲母書房.
- 小川洋子・河合隼雄 (2011) 生きるとは, 自分の物語をつくること, 新潮社.
- 佐藤眞一 (2014) 死にゆくところ, 佐藤眞一・高山みどり・増本康平, 老いのところ 加齢と成熟の発達心理学, 有斐閣アルマ, pp225-250.
- 総務省統計局 (2015) 統計トピックスNo.90統計からみた我が国の高齢者 (65歳以上) —「敬老の日」にちなんで—, 平成27年9月20日,
(<http://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/topics90.pdf> 2016年11月20日閲覧).
- Vladimir Jankélévitch (1966) *LA MORT*, Flammarion, Editeur, Paris (仲沢紀雄訳 (1978), 死, みすず書房).
- やまだようこ (2010) この世とあの世のイメージ 描画のフォーク心理学, 新曜社.
- 山中康裕 (1991) 老いの魂学, 有斐閣.
- 柳田國男 (1990) 先祖の話, 柳田國男全集 第13巻, ちくま文庫.
- 湯本香津実 (1992) 夏の庭, 福武書店.

A “Tender” Attitude toward Life and Death: From the Comments of University Students Studying the Psychology of Aging

KUBOTA, Miho

Once we lived in a society where “*Konoyo* (this world)” was nearer to “*Anoyo* (another world)”, and “The Unknown” was left as it is in daily life. Now in our super aging society, there is a steady increase in the number of the dead, and we are starting to lose this view of life and death.

How can this former attitude toward life and death to be recovered? In this paper, in order to find an answer to this question, university students were asked to give their comments and share their feelings towards elderly people who are living with the realization of approaching death.

The author felt that university students could shed fresh, sensitive light on this problem.